

1 隠し蛇

2 ※収録中に変わったセリフもあるため、一部セリフが異なる場合があります。

3 4 5 あらすじ蛇

6 ある日ふと、この世とあの世の隙間に入り込んでしまったヒロイン。
7 そこで既に信仰を失って消えゆく最中の蛇神「白嶺」に、魅入られる。
8 序盤では幸運値が上がるタイプの加護を得ていたヒロインだが、
9 その過程で民からの信仰を取り戻した白嶺により、神隠しされる。
10

11 登場人物

12 ・白嶺（しろみね）さま

13 数百歳（肉体的には二十代後半〜三十台前半）、長身の蛇神様。
14 とある鬼を封印する役目を持っていたが、ついこの間鬼に負けて封印を破られた。
15 ついでに住んでいた神社も追い出されたし、もう信仰してくれる人間たちもないので、
16 あとは消えていくだけの運命だった。
17 もはやこれまでと諦めてぼーっとしてる時に、ヒロインと出会う。
18 人に祈られて生まれた神なので、人間には好意的。
19 人類のことは可愛いけど弱すぎでかわいそうだよね〜と思っていたが、
20 消えゆくだけの自分に信仰をくれたヒロインに執着を見せ始める。
21 ダウナー系。ヘミペニス。
22

23 ・後輩

24 フレンドリーだが感じの悪さが目立つ男。
25 オカルト系の匿名掲示板に出入りしている。
26 自分もそういう話をばら撒く立場になりたい
27

28 ・ヒロイン

29 少々考えが足りない、何の変哲もない女性
30
31

序

SE:キーボードカチャカチャ

【巨大掲示板の洒落怖スレに書き込みをする後輩】

後輩「しろみね様って、知ってる？

幸運を司る白い蛇の神様なんだけど、

悪い鬼に負けて力が弱まってるらしい。

だから、どんなに簡単でもいいから祭壇を作って、

そこに『白嶺様』って書いた紙を置いて、

お酒を供える。

そうすると、信仰のお礼に幸運をさずけてくれるんだって。

めちゃくちゃついでる先輩から無理やり聞き出して、

昨日半信半疑でやってみただけど、

今日パワハラ上司が事故っててちよつとビビった」

後輩「先輩は誰にも言うなって言ってたけど、

神様って、信者が増えるほど強くなるらしいし、

このみんなと同じことすれば、

もっと凄くなるんじゃないか？ と思ってた書き込みました。

みんなでしろみね様を最強の神様に育てようぜ！」

SE:カチャカチャ……ッターン

SE:鈴ンヤン

トラック① 蛇神

1 仕事の帰り道で不思議と迷子になり、
2 うっかり人ならざるものの使う道に入り込んでしまったヒロイン、
3 雨の中立ち尽くしている白嶺に出会う。

4
5
6 【雨の中、見覚えのない住宅街の夜道を歩くヒロイン】

7
8 SE:雨音

9 SE:雑踏

10 SE:ヒロインの足音

11
12 SE:シャン…みたいな感じの鈴の音

13 SE:突然雨音&雑踏ストップ

14
15 【6 ヒロインに背を向けて立っていたが、気づいて振り返る】

16 白嶺「……おや、どうしてこんなところに人の子が？

17 見たところ、贄の類でもなさそうだが……

18 異界に迷い込むとは、随分と運がない。

19 かわいそうに、向こうまで案内してやろう。

20 こちらへおいで」

21
22 【ヒロイン、警戒して近寄らない】

23
24 白嶺「どうした？

25 うかうかしていると、帰れなくなってしまうぞ。

26 まだ人の子のままでもいいだろう」

27
28 【ヒロイン「不審者…」】

29
30 白嶺「ふ、不審者……！？」

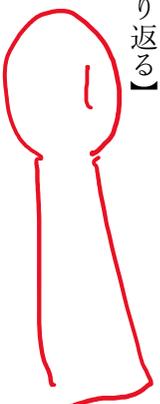
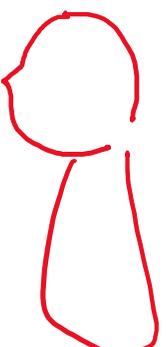
31 ま、祭るべき神を前に、

32 言うに事欠いて不審者とは……

33 【深くため息】……いや、無理からぬことか。

34 信仰を失った今の世にあって、

35 私の姿はいかにも不審であろう」



1 【6】
2 白嶺「では、お前が納得できる距離を置いて、
3 私の後ろについてくるといい。
4 強制はしないが……
5 道も知らぬ人の子が闇雲に歩いたところで、
6 未来永劫出られはしまいよ。
7 いつしかヒトであったことすら思い出せなくなる。
8 【背を向けながら】それが望みなら、好きだけそこにいるがいい」
9

10 【白嶺、ヒロインの斜め前あたりを歩き始める】

11 SE:白嶺の足音

12 SE:ヒロインの足音

13 【6 ヒロインに背を向けて】

14 白嶺「ふ……ついてくる気になったか。
15 賢明だな」
16

17 【ヒロイン「ここはどこ?」】

18 白嶺「ここか? そうだな……どう説明しようか。」

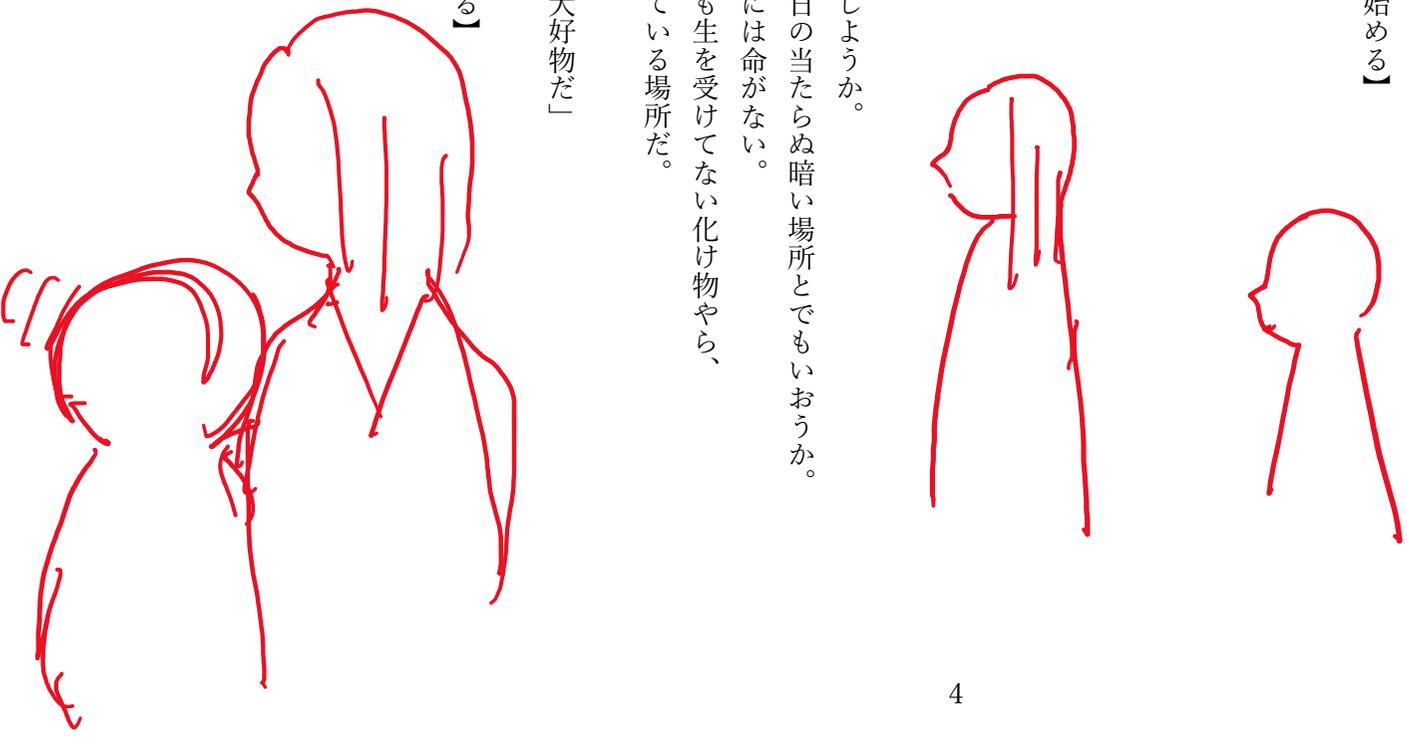
19 現世(うつしよ)の裏側にある、日の当たらぬ暗い場所とでもいおうか。
20 現世とよく似ているが、この場所には命がない。
21 すでに死んだ生き物やら、そもそも生を受けてない化け物やら、
22 そんな奴らが目的もなくうごめいている場所だ。
23 奴らは温かいものを好む。
24 例えば、迷い込んだ人の子などは大好物だ」
25
26
27
28

29 【ヒロイン、怯えて白嶺の隣まで走り寄る】

30 SE:ヒロインの駆け寄る足音

31 【11 ヒロインを軽く見下ろして】

32 白嶺「おや? 怖がらせてしまったか。
33 案ずることはない。
34 弱ってはいるが、これでも神だ」
35
36



1
2
3 白嶺「守ると決めた人の子に、有象無象を近づかせはしない」

4
5 【11】

6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

【ヒロイン「本当に神さまなの？」】

白嶺「そうとも。ようやく私が神だと信じる気になったか？

しかし、まあ、神と言っても今ではどうか……

人の子に望まれて神になったが、

もはや誰にも祈られることもなくなった、

哀れな神の末路と言った方が正しいな」

【ヒロイン「どこに祭られてるの？」】

白嶺「私の社か？

【前を見て】ここから東にしばらく行ったところの、

古い神社はわかるか？

はは【自嘲笑い】、それが分かるようなら、

私はこうして力を失ってはいまいな」

白嶺「先日まではその所に祀られていたが……

力を失い鬼に領域を奪われた。

それゆえ、寄る辺もなくこうして異界を漂っておるのさ。

あとは徐々に力を失い、我が身が尽きるのを

ぼんやりと待つばかりだ」

【ヒロイン「あなた、死んじゃうの？」】

【ヒロインを見て】

白嶺【「不思議そうに】どうした、なぜお前がそんな顔をする。

心配せずとも、お前にそもそも私の加護はなかった。

時代遅れの一柱（ひとはしら）が消えたところで、

何も変わりはない」

1 【11】
2 白嶺「ああ、同情したのか。」

3 ふん【自嘲】、人の子に哀れまれるなど、初めての経験だ。

4 【前を見て】ふ、ふふふ……

5 この私が、人ごときに、なあ……」

6
7 【白嶺、現世への境が見え、立ち止まる】

8
9 【11 進行方向を向いて】

10 白嶺「ああ、着いた。」

11 このまま真っ直ぐ進めば帰れる。

12 もう二度と来るな……と言いたいところだが」

13
14 【11 ヒロインの方に向き直る】

15 白嶺「少々、長居してしまったようだな、

16 【近寄って軽くスンスン嗅ぐ】…異界の匂いが移っている。

17 しばらくは夜道を歩くのをやめなさい。

18 うっかりしていると、またこの道に引き込まれてしまう。

19 なに、ほんの十年ほどの辛抱だ」

20
21 【ヒロイン（生活があるので）無理】

22
23 【9 向かい合う距離】

24 白嶺【呆れた】わからないのか？

25 今回は出会ったのが私だったからよかったものを、

26 腹をすかせた魑魅魍魎に会ってしまったえば終わりなんだぞ。

27 お前の小さな脳みそで想像するよりももっと、

28 恐ろしいことが起こる」

29
30 【ヒロイン「えー」】

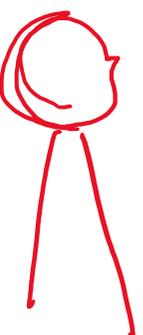
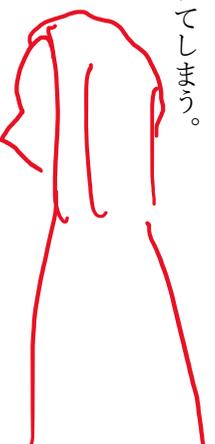
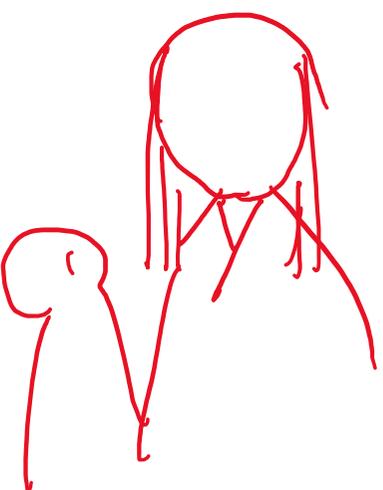
31
32 白嶺「聞き分けのないことを。」

33 全く……人の子というのは、いつの世もまことに愚かだな。

34 無理と言うなら、仕方がない。

35 できるだけのこととしてはやろう」

36



1 【9】
2 白嶺「【ぶつくさと】人の子に祀られていた身ゆえ、
3 やすやすと人の子を見捨てられぬ。
4 ほら、顔を上げて額を出せ」
5

6 【白嶺、ヒロインのおでこにキス】
7

8 【ヒロイン突然のことにおでこを袖などで拭く】
9

10 SE：ぬぐう衣擦れ
11

12 白嶺「【ムツとして】おい、ひたいをこするな。
13 信じがたい不遜さだな」
14

15 【ヒロイン「急にキスされたから」】
16

17 白嶺「嫌そうに」何が口づけた。馬鹿も休み休み言え。
18 お前に私の印をつけておいた。
19 もし万が一、再びここに迷い込むことがあれば、
20 額に意識を集中して「しろみねさま」と言え。
21 そうすれば、お前が食われる前に駆けつけてやる。
22 ほら、ために言ってみろ。むろん、心をこめてな」
23

24 【ヒロイン「しろみねさま？」】
25

26 白嶺「ふむ……もう一度、言ってみろ」
27

28 【ヒロイン「しろみねさまー？」】
29

30 白嶺「ふーむ……これはなかなか……」
31

32 【はっとして】おっと。すまない、少しひたっていた。
33 人の子にそのように呼ばれるのは、随分と久しぶりだったのでな。
34 昔は毎日のように人の子が供物を持ってきて、
35 しろみねさま、しろみねさまと呼び慕ってきたものだが」
36

1 【9】
2 白嶺「懐かしんで」特に酒、あれは良かった。飲むとふわふわとしてな。
3 人の子が寄越す物の中では、あれがいつとう気に入っていたよ。」
4

5 【我にかえる】

6 白嶺「……長話をしてしまったな。

7 これ以上は本当にまずい。

8 さあ、もうお行き。

9 【優しく】……会えて良かった。

10 もう二度と会わずに済むよう、願っているよ」
11

12 【ヒロイン歩き去る】
13

14 SE:足音

15 SE:雨音フェードイン

16 SE:いきなり街のガヤガヤした感じ（車の音とか、雑踏感？）
17

トラック② 一献

寂しげだった白嶺にお供え物でもしてやろうと、
夜に白嶺と会った路地に向かったヒロインだったが、
その道中異界に迷い込む。

SE:雑踏

SE:ヒロインの足音 砂利道

SE:鈴シヤン

SE:雑踏ストップ

SE:ヒロインの背後から大蛇の動くズルズルした音フェードイン

SE:はいずり音ストップ

SE:突然近くから足音

【4 呆れ声】

白嶺「二度と来るなどあれほど言い含めたというのに、
昨日の今日で、なぜここにいる。
まさかとは思うが、どうせ私の加護があるからと、
うかうかと軽い気持ちで夜道を歩いたのではあるまいな？」



【ヒロイン、白嶺に振り替える】

【6】

白嶺【説教】何を腑抜けた顔をしている。
事の重大さがわかっていないようだな。
友のことも家族のことも忘れ、
自分が何者かすらもわからなくなった状態で、
何ぞ（なんぞ）に喰われるまで、
異界を彷徨いたいかな？」

【7 耳元で脅す】

白嶺「今からでも、私がお前を見捨てればそうなる。
落ちぶれたとはいえ神の言葉に従えないような人の子を、
守ってやる義理はないのだぞ」

【ヒロイン「お供え物を持ってきた」】

1
2
3 【6】
4 白嶺「きょんとんとして】なに？ 供え物……？
5 そのために、わざわざ神社に近づいたのか？
6 それは……殊勝な心がけだ」

7 【ヒロイン、お土産の日本酒（ワンカップ）を差し出す】
8

9 SE:カバンゴソゴソ、お酒がワンカップの中で揺れる音
10

11 SE:受け取る衣擦れ
12

13 白嶺「ほう、酒か。
14

15 私の話覚えていたのだな、
16 （機嫌が良くなる）お前もなかなか、わきまえているじゃないか。
17

18 まだ私の神社に人が来ていた頃は、
19 よくこれを供えられていた」
20

21 【白嶺、ワンカップを開ける】
22

23 SE:ワンカップ開栓
24

25 【お酒の香りにしみじみ】
26

27 白嶺「ああ、これだ……この香り……。
28

29 久しすぎて、匂いだけでも酔いそうだ。
30

31 懐かしいな……本当に… 【一口飲む】
32

33 ははは、臓腑に染み渡る。
34

35 【一気飲み】んん、美味しい」
36

SE:その辺にワンカップポイして割れる音

【酒が回ってややテンションが上がってくる】

白嶺「ああ、いいぞ。いい気分だ。
34

35 これほどに愉快なのは、いつぶりだろうな」
36



1 【9】

2 白嶺「しかも、この酒……この懐かしい味は。

3 覚えがあるぞ。

4 これは祈りの味だ。

5 お前は酒に祈りを込めて私に捧げたのだな……ふむ……

6 【思いついて】よし、私の手に触れてみる」

7

8 【白嶺が差し出した手にヒロインが触れる】

9

10 白嶺「どうだ？

11 前よりも随分、私の形がはっきりしただろう。

12 お前の祈りが、消えかけていた私をつなぎとめた」

13

14 【ヒロイン「(人外の些細な違いとか) わからない】

15

16 白嶺【少し不満げに】わからないか？

17 この間触れた時とは、雲泥の差だが……。

18 ああ、そうか。

19 前は額に口付けただけだったな。

20 それでろくに覚えていないのだろう」

21

22 白嶺「ああ……それにしても、お前のこのあたたかさ。

23 昨日は、これを感じもできなかった。

24 ずっと握っていたくなる」

25

26 SE:ヒロインの身じろぎ

27

28 白嶺「お前を怖がらせぬよう人の子の姿を借りているが、

29 私の本性は蛇だ。

30 だからこうして温かいものに触れると、

31 離しがたくなってしまう。

32 こうしていると、神社があった頃に、

33 日向でまどろんでいたことを思い出す。

34 どうせ消えるのなら、

35 あそこで眠るように逝きたかったが……」

36

1 【ヒロイン、手を握り返す】

2
3 【9】
4 白嶺「うん？ どうした。またこの私を哀れむのか？
5 哀れまれてばかりでは、神としての沽券にかかわる。
6 そうだな、よし。

7 今夜、自分の部屋に神棚を作りなさい。
8 なに、簡易なものでいい。
9 木の棒で鳥居を組み、白嶺と書いた紙を置く。
10 字はわかるか？ しろは色の白。
11 みねは、上に山のかんむりを乗せたやつだ。」
12

13 白嶺「それに毎日、酒を供えるといい。
14 そうすれば私は、
15 少なくともお前が祈っている間は生き永らえる。
16 そして私は、お前が祈る限り、
17 お前だけの神として、お前一人を守護してやる。
18 どうだ？ 嬉しいだろう。
19 滅びかけとはいえ、神にそこまでしてもらえる人の子など、
20 これまで一人としていなかったのだからな」
21

22 白嶺「これよりお前は、蛇神（へびがみ）白嶺のものとなる。
23 お前が危機に陥った時は、必ず私が助けてやろう。
24 さあ、もっと近くへ。
25 加護をやるには、先日よりも深く印を刻む必要がある」
26

27 【1】
28 白嶺「口を開けなさい。舌を出して、私の目を見て……」
29

30 【ヒロイン、舌を出す】
31
32 白嶺「よろしい、ではまずはお前のこの、小さな口の中に、
33 たっぷりと、私の印をつけてやろうな」
34
35
36



1 【1】

2 白嶺「キスの合間にセリフを言ってください」

3 んん……薄い舌だな……牙を立てたら…

4 んちゅ…簡単に…穴が空いてしまいそうだ。

5 ああ、体の内側はやはり…ん、

6 ことさら、熱いのだな……

7 おや、たよりない喉だ。

8 こんなに細くては、私の舌を入れれば、

9 完全にふさがれてしまうなあ。

10 そら、喉の奥まで舌をねじ込むぞ。

11 たいそう苦しいぞ。

12 私にしがみついて耐えなさい」

13
14 【ディープキスのリップ音のみ30秒程度】

15
16 白嶺「はあ……。

17 おお、よしよし。よく耐えた。

18 【ご機嫌】はは、そんな目で見えるな。

19 あまりいじらしい顔をされると、

20 丸呑みにしてしまいなくなる。

21 はっ【笑】、冗談だ。

22 せっかくの眷属を、食べてしまっってはしょうがない。」

23
24 白嶺「よし、次だ。

25 服を脱いで、その壁に手をつきなさい」

26
27
28 【ヒロイン、恥ずかしがって拒否】

29 【きょとん】

30 白嶺「なんだ、何を嫌がる？」

31 ここは異界だ。脱いだところで寒くもなからう。

32 私が直々にそのややこしそうな服を脱がしてやってもいいが、

33 あちこちを破かずに済むかは保証せんぞ」

34
35 【白嶺、人類に羞恥心があることを思い出す】

36

1 【1】
2 白嶺「ああ、そうか。」

3 私が人の姿だから恥じ入っているのだな。

4 【愉快そうに】愚かだな。

5 お前と私では、存在としての差が天と地ほどもある。

6 お前とて、犬や猫が裸だからと

7 気まづく思うことはないだろう」

8
9 【ヒロイン、なおも拒否】

10
11 白嶺【ムツとして】要らぬ恥じらいで手間取らせるな。

12 まったく、仕方がない。

13 では髪をかき上げて、首を傾げなさい」

14
15 【ヒロイン「どうして？」】

16
17 白嶺「今からお前の首を噛む。」

18 少し痛みはするが、なに、針の先でつつかれた程度よ。

19 服を脱ぐ方が嫌なのだろう？」

20
21 【ヒロイン、渋々了承】

22
23 【言いながら1↓7（首元）へ口を寄せる】

24 白嶺「よし、ではそこを動かすな」

25
26 【白嶺がヒロインの首を噛んで、思考が麻痺する毒を仕込む】

27
28 【7】

29 白嶺「これでいい。」

30 おっと、血が出てしまった。

31 大丈夫だ、俺がこうして、

32 【首すじねっとり舐める】

33 舐めてやれば、小さな傷などたちどころに治る」

34
35
36



1 【1】
2 白嶺「さあ、今度は素直にできるな？」
3 私の牙の毒にかかれば、
4 人の子のいらぬ理性など、瞬く間にとけくずれる」
5

6 【一言一句言い含めるように】
7 白嶺「服を、脱いで」
8

9 【ヒロイン、ぼーっとしたまま服を脱ぐ】
10

11 SE: 衣擦れ、服を地面に落とす音
12

13 【1】
14 白嶺「壁に、手をつくんだ」
15

16 【ヒロイン、後ろを向いて壁に手をつく】
17

18 SE: ヒロインの足音

19 SE: 壁（コンクリ）タッチ
20

21 【13 満足げ】

22 白嶺「うん、それでいい。」

23 人の子なのだから、神の言うことには
24 素直に従わなければ」
25

26 【3 至近距离】

27 白嶺「よいな？ では、お前に印を刻んでやろう」
28
29
30
31
32
33
34
35
36



1 **トラック③ 加護**

2 トラック②の続き

3

4 **【5】** 白嶺「安心しなさい、壊しはしない。」

5 加減は心得ているとも。

6 さて、準備はもう整っているか？」

7

8

9 **SE:衣擦れ**

10 **SE:水音(指を入れる)**

11 白嶺「ふむ……濡れているが、しかし狭い……。」

12 いきなり押し入っては、裂けてしまうやもしれんな。

13 ああ、怖がらなくていい

14 **【耳元(4)で】**ちゃんと入るようになるまで、

15 いくらでも時間はかけてやる」

16

17 **【4】**

18 白嶺「足を軽く開くんだ……そう。」

19 片手を壁から離して…大丈夫、私が支えておく。

20 **【背後から腰を抱いて】**はは、頼りない感触だ。

21 ほとは自分で触りなさい。

22 どうやれば気持ち良くなれるかは、

23 自分が一番わかっているだろう。

24 私も手伝ってやるから、よく励むといい。

25 お前はどうぞされるのが好みだ？」

26

27 白嶺「そうだ……胸はどうだ。」

28 まだ触ってもいないのに胸先を固くして、

29 随分と物欲しそうじゃないか。

30 ここを、こうして、ひっかくと…はは！ いい反応だ。

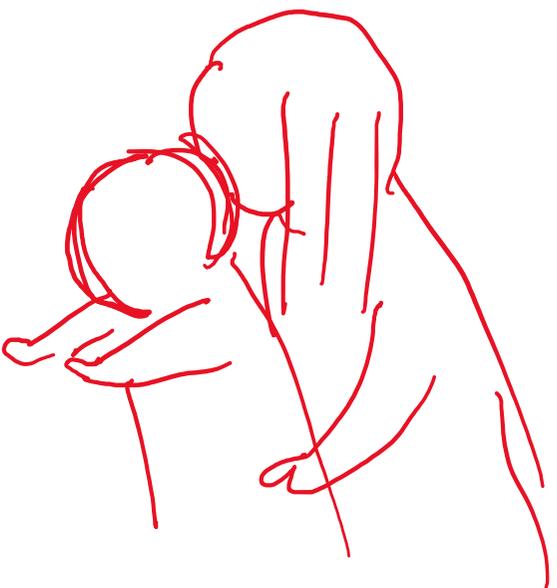
31 ほら、手も休めるな。

32 ちゃあんと自分で濡らして、私を受け入れる準備をするんだ」

33

34

35



1 【3 至近距離】
2 白嶺「耳まで赤くして、愛いことだ。
3 舐めれば果実の味でもしそうだが……」
4

5 【3 白嶺、ヒロインの耳をひとなめする】
6

7 【3 至近距離】

8 白嶺「おや、こちらも弱いか。」

9 よしよし、存分に乱れるといい。

10 はは、声を殺すな。

11 ちゃんと発情している様を、私に見せなさい」
12

13 【3 耳舐め30秒程度】
14

15 白嶺「んー？」

16 【7に回って】こちらも可愛がってほしいか？

17 強欲な娘だ。そら、鼓膜まで愛撫してやる」
18

19 【7 耳舐め30秒程度】
20

21 【7】

22 白嶺「なんだ、もう果てそうなのか。堪え性のない。

23 いいだろう、そのまま果てなさい。

24 自分で浅ましく己を慰めて、私を欲しながら果てるといい。

25 ほら、いけ、いけ！」
26

27 【ヒロイン自慰でイク】
28

29 【6】

30 白嶺「……ははっ、随分と派手に達したじゃないか。

31 蛇の毒がそんなにもきつかったか、

32 それとも、元々の淫乱か……

33 恥じることはない」
34

35

36

1 【6】
2 白嶺「さあ、足をもう少し開いて、尻をこちらに突き出しなさい。
3 自分で広げて、私を受け入れやすいように。
4 そう、いい子だ。
5 ここまで濡れていれば、もう大丈夫だな？
6 力を抜きなさい、行くよ……」

7
8 【挿入】
9

10 SE:ゆっくりから徐々に激しくなっていくピストン
11

12 【腰を振りつつ】

13 白嶺「く、ふ……流石に、まだ、きついか、はは
14 すまない、なあ、やはり人の子には、少々……
15 ふふ、だが、痛みはすまい。
16 大丈夫、私の毒は、ちゃあんと、
17 お前を、ケモノに、してくれるとも……っ」
18

19 白嶺「ああ、ひどい音だ、聞こえるか？
20 お前のあさましい『ほど』が、濡れそぼって、
21 雄を啜え込んで、嬉しい、嬉しいと、
22 はしたなく喜ぶ音だ。
23 はは、これなら遠慮は、せずとも、
24 良さそうだ、なっ……【ピストン勢いを増す】」
25

26 SE:ピストン加速
27

28 白嶺「ははっ、いいぞ、思う存分声を上げろ。
29 あたりの魑魅魍魎が、
30 お前の乱れる様を、物欲しそうに、
31 じっと見ているぞ。
32 せっかくだ、見せてやれ。
33 お前が、こうして、私のモノを出し入れされるたびに、
34 哀れな声をあげて、喜ぶ姿を」
35
36

1 【6】
2 白嶺「どうした、随分と良さそうじゃないか。
3 見られて興奮する性質（たち）か？
4 はは、なるほど、社（やしろ）を失った私でも、
5 こうして淫乱一人くらいは、悦ばせてやれるらしい」
6

7 【白嶺、体を伏せてヒロインの耳元でささやく】
8

9 【7 至近距離】

10 白嶺「もつと遊ぼうじゃないか、小娘。
11 まだまだ、こんなものじゃないだろう？ 【耳を軽く舐める】」
12

13 白嶺「ははは、こうも良く反応されると、
14 手加減も、できやしない。
15 そら、もつと鳴きなさい。
16 鳴くんだった、ははは！
17 ……ああ、まったく……なんと甘美な……」
18

19 白嶺「そんなに締め付けて、私が欲しくてたまらないか？
20 よしよし、そこまで欲しがるなら、はは、いいとも。
21 私は慈悲深い、お前の神なのだから。
22 うんと締めろよ、今、くれてやる……！ 【射精】」
23

24 【しばし余韻に浸る白嶺（一〜三秒程度吐息のみお願いします）】
25

26 白嶺「……ふう、少々、激しすぎたか？
27 こんなに全身を熱くして、かわいそうに。
28 よしよし、よく頑張ったな。
29 久々のまぐわいに、つい我を忘れてしまった」
30

31 白嶺「無理はさせてしまったが、
32 これでお前と私には強い縁ができた。
33 私の匂いがたっぷりと染み付いて……
34 もう、どこに居てもわかる。
35 はは、気分のいいものだな……」
36

1 白嶺「歩けるか？

2 それでは、うちに帰りなさい。

3 またいつでも会いに来るといい。

4 他の輩について行ってはいけないよ……」

5

6 SE:ヒロイン服を着直す衣擦れ音

7 SE:ヒロインが歩き出す足音

8

9

トラック④ 拡散

白嶺に印を付けられてから、やたらと金運の良いヒロイン。
ヒロインの景気の良さを見て、詮索好きの後輩がその秘密をしつこく聞きにくる。
自分が白嶺を祀っていることを告白する。

SE:雑踏ガヤガヤ

SE:ヒロインの足音

【仕事からの帰り道、一人で歩くヒロインに後輩が追い縋ってくる】

SE:駆け寄ってくる足音

【12 背後から声をかける】

後輩「せんぱい」

SE:ヒロインの足音(早足)

【12↓4 背後から近寄ってくる】

後輩「ちょちょ！ なんで逃げるんですか!？」

おっい！ ねえ、ねえって……ば!」

SE:ヒロインの背中をバシッと叩く

SE:足音ストップ

【しどしど立ち止まり、後輩と向き合うヒロイン】

【1】

後輩「そんなに逃げなくていいじゃないですか。

ただ先輩が、ここ最近のツキまくってる

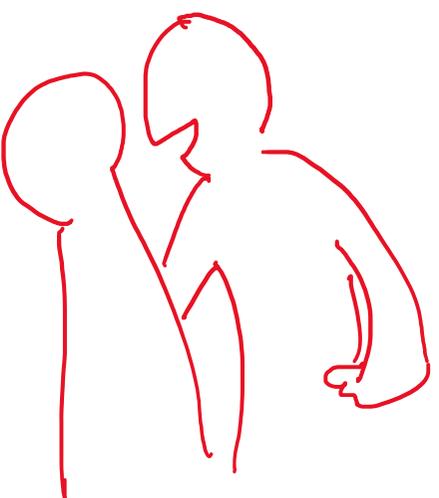
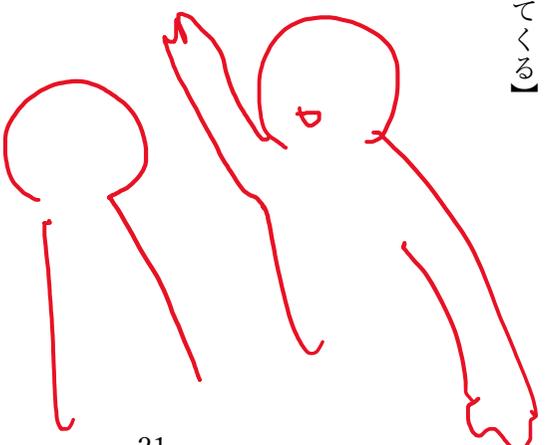
理由を教えてほしいだけなのに!

ごまかしても無駄ですからね!

昨日だって、お昼休みに買ったスクラッチクジで、

一等当たったんでしょ?

占いか何かですか?」



1
2 【ヒロイン「何もないって」】
3
4

5 【1】

6 後輩「何もないわけじゃないですか！

7 こんなので、あきらまか不自然ですよ！

8 心当たりだけでもいいんで、教えてくださいよお

9 じゃないと、ほら、心無い誰かが嫉妬とかで

10 有る事無い事噂したりするかもしれないし？

11 ねえ、僕にだけ教えてくださいよ。

12 そしたら、うまいことみんなに話してあげますから。

13 いろんな人に、何回もこんな風に聞かれるより、

14 ずっとマシでしょ？」

15 【ヒロイン「白嶺様ってしってる？」】
16

17 後輩「シロミネさま？ 知ってますよ。

18 この間、つぶれた神社で祀ってた神様ですよね。

19 最近、ネットでちょっと有名なんですよ、心霊スポットとして。

20 夜中に行くと、女の人の啜り泣きとか悲鳴とかが、時々聞こえるとかで」
21

22 【ヒロイン「家でその神様を祭ってるだけ」】
23

24 後輩「家に、白嶺様の祭壇と……お酒のお供え物？

25 ふうん、全部ホームセンターで揃いそう」
26

27 【14】

28 後輩「ありがとうございます先輩！

29 僕もさっそく作って、スクラッチ買ってみよ〜！

30 じゃあ僕こっちなんで。

31 お疲れ様で〜す！」
32

33 SE:後輩歩き去る(可能なら軽やかにしてください)
34
35
36

1 トラック⑤ 返礼

2 ヒロインの夢の中（ヒロインは夢と気づいてない）に白嶺が現れ、
3 最近バズったおかげで信仰が集まって、
4 色々できるようになったことを伝えるに来る。
5 イチャラブエッチ回。

6 ※夢の中なので、瞬間移動や服が突然消失するなど発生します

7 【ヒロイン寝室、夜】

8 SE:鈴虫の声

9 SE:ヒロインが布団の中で身じろぎ

10 SE:鈴シャン

11 【2 徐々に声はつきりしてくる】

12 白嶺「おい……起きなさい……おい……ああ、やっと目を開いたか」

13 SE:ヒロイン布団からガバッと上半身を起き上げる

14 【白嶺、ベッドに横たわるヒロインの横に立っている】

15 【6 得意げ】

16 白嶺「ははは、驚かせてしまったか。

17 安心しろ、今回のお前は迷っていない。

18 私の方から夢を伝って会いにきたのだ、嬉しいか？」

19 【ヒロインは混乱しているが、白嶺は上機嫌に話を続ける】

20 白嶺「今夜は礼をしに来た。

21 お前、私のことを誰かに話しただろう。

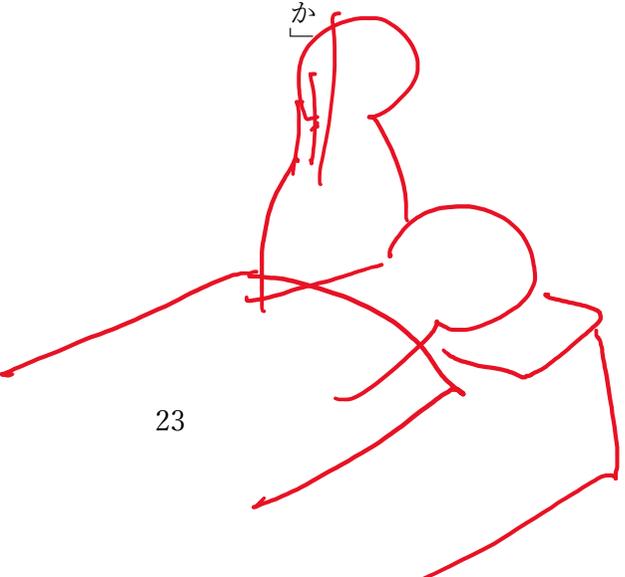
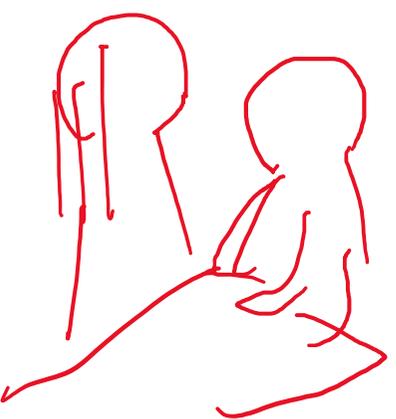
22 何人かが、お前と同じように祭壇を作ったようだ。

23 それに少しばかりの加護を与えてやったら、

24 信者がまたたく間に増えていったな。

25 この国中から、数え切れぬほどの祈りが集まってくる」

26 【ヒロイン、心当たりがある】



1
2
3 白嶺「うっとり」ああ、身のうちにこれほどの力を感じるのは、
4 いつぶりだろうな。

5 感謝するぞ、人の娘よ【額にキス】
6

7 白嶺「うん？ 照れているのか？」

8 すでに全て知った仲だというのに、ウブなことだ。

9 ——ところで、いつまで神を立たせておく気だ？

10 床に招くのが礼儀だろう。

11 夢とは言え、寒い。」
12

13 【白嶺、ヒロインのベッドに乗り込む】
14

15 SE:キシンツ

16 SE:衣擦れ
17

18 【1】

19 白嶺「ああ、やはり温かいな。お前の温かさは格別だ。

20 今の私なら、前よりずっと色んなことができる。

21 ほら、望みを言ってみろ。

22 さらなる富か？ それとも、お前を苦しめるものの死か？

23 なんてことでもかなえてやろう。

24 お前は私の特別なのだから」
25

26 【ヒロイン「特別？」】
27

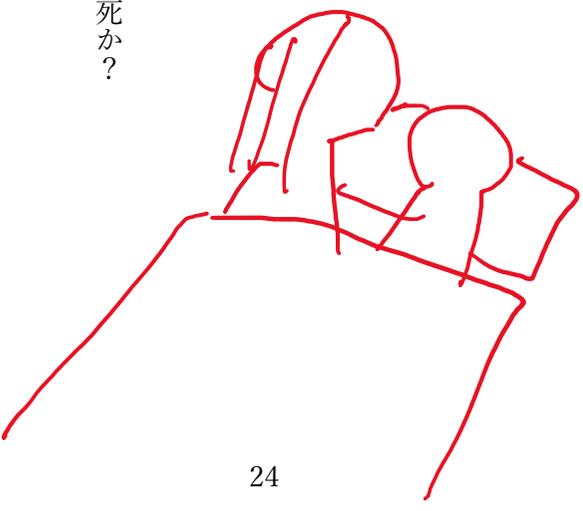
28 白嶺「そうだ、どれだけ私に祈るものが増えようと、
29 お前とは違う。

30 お前だけが私の心を温め、特別な気分させる」
31

32 【3 耳元で囁く】

33 白嶺「望みを教えておくれ。

34 私はお前のことを、特別に甘やかしたいのだ。
35 ……なんだ、急には思いつかないか？」



1 【3 耳に繰り返しキスしながら】
2 白嶺「ゆっくりと考えるといい。
3 私はお前のためなら、
4 なんだって、してやれる」
5

6 【ヒロイン、感じてもじもじしだす】
7

8 SE:衣擦れ
9

10 【1】
11 白嶺「うん？ クックック。
12 なるほど、どうやらお前は、
13 私の体がほしくてたまらないようだな。
14 お前は本当に、私を喜ばせるのが得意だな。
15 いいとも、たっぷりとくれてやる」
16

17 白嶺「口を開き、舌を突き出せ。
18 いい子だ。」

19 【ディープキスしつつ】
20 ふふ、お前はどこに触れても、切ない声を出す。
21 もっと、のどの奥まで触れてやろう」
22

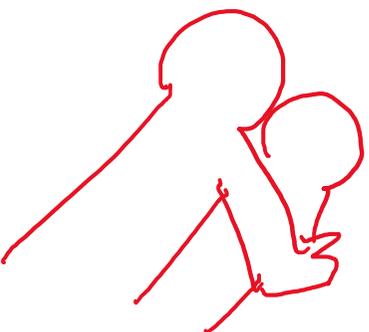
23 【ディープキス30秒程度】
24

25 【1】
26 白嶺「ああ、服が邪魔だな。脱がすのも面倒だ……消してしまおう」
27

28 SE:指はじくへ
29

30 白嶺「これですっきりした。驚いたか？ ここは夢だ。なんでもできるさ」
31

32 【1 首筋にキスを散らしながら】
33 白嶺「相変わらず、細い首だな。
34 こんなに皮が薄くて、
35 どうしてここまで生きてこられたんだ？
36 【キスここまで】」



1
2
3 白嶺「もっと欲しいのか？ いいとも
4 他ならぬお前の望みなら、なんでも叶えてやる。
5 今度はどうされたい？
6 丁寧にはぐされるのが好みか？
7 先ほどから物欲しそうに尖っている、
8 この胸先（むなさき）を、こうして、舐めて【乳首舐める】
9 可愛がってやると——はは、いい声で鳴く【乳首終わり】
10

11 SE:シットギンッ

12
13 【白嶺、ヒロイン跨いで膝立ち】
14

15
16 【1】

17 白嶺「こうして、裸体を晒すお前を前から見下ろすのは初めてだな。
18 人の子のように向き合って交わるのも、悪くない。
19 お前はどうか、気に入ったか？
20 こうやって抱きしめると——」

21 SE:抱きしめる衣擦れ

22 SE:シットの軋み

23
24 【e 耳元】

25 白嶺「お前の熱がよくわかる。

26 【うっとりため息】……心臓が、
27 とくとくと鳴っているのが聞こえる。
28 緊張してるのか？

29 それとも……【ヒロインの中に指を挿入する】
30

31 SE:水音（単発）

32
33 【e 軽く下を見て】

34 白嶺「ああ、興奮の方が。

35 わかるか？ 指がすんなり入ったぞ。

36 私を求めて、濡れて熱く絡まりついて……」

1
2
3 【手マン開始】

4 SE:水音(継続)

6 白嶺「お前はいつも、指を入れただけで乱れるな。

7 そんなにここに触れられるのが気持ちいいのか？

8 それなら、こうして入り口から中をさすって、

9 奥までしっかりと愛でてやろう。

10 はは、気持ちがいいか？

11 そんなに切ない声を出されると、私がお前を苛んでいるようだ

12 ああ、遠慮しなくていい。

13 存分にそうやって、発情した声を上げろ」

14
15 SE:手マン水音終了

16
17 【1】

18 白嶺「見ろ、私の方もこんなに固くなって……

19 着物が窮屈なくらいだ。

20 私ももう、我慢が効きそうにない」

21
22 【白嶺脱衣】

23
24 SE:衣擦れ

25
26 【ヒロイン思わずガン見】

27
28 白嶺「そのまま目を逸らすな

29 お前が私を受け入れるところを、

30 しっかりと、目に焼き付けろ【挿入】

31
32 SE:挿入

33 SE:ストーン(低速)

34
35
36

【1】

1 白嶺「あっさり、飲み込んだな…」

2 お前と一度交わってから、ずっと、こうして、

3 再び繋がりがたかった…！

4 柔らかくて、熱くて、嬉しそうに、私を迎えて…！」

5
6
7 白嶺「私の名前を呼んでおくれ。

8 その、甘い声で。

9 何度も、何度も。

10 お前がそうするたび、私がどんな心地になるか、

11 知らないだろう。

12 もっと、もっと。

13 お前の頭の中が、私だけでいっぱいになるように…！」

SE:ピストン (中速)

14
15
16
17 白嶺「ああ、そんなに締め付けると、

18 あっという間に果てそうだ…っ

19 私の名を呼んで、きゅうきゅうと、絞って…

20 もう少し待て、もう少し、お前を味わわせておくれ…っ」

21
22 白嶺「どうしてお前はこうも、私を喜ばせるのがうまいのだろうか。

23 まるで私のためにあつらえた、供物のようだ。

24 頭から丸呑みにして、

25 そのまま腹に収めてしまいたいほど、愛らしい。

26 ふふ、それは怖いかな？

27 なら、やはり、こうして、繋がるのがいい

28 お前と触れ合えるのなら、私はもう、他に何も、望むまいよ…っ」

SE:ピストン (高速)

29
30
31
32 白嶺「はあ、いいぞ、好きなだけ、鳴くがいい。

33 その声が私を、また昂らせる

34 激しいのも好きか？ はは、気が合うな

35 いいとも、ではこのまま、お前の中の、

36 私以外誰も入れないような、奥の奥まで、犯してやろう」

1
2
3 白嶺「わかるか？ 私もそろそろ限界だ。
4 一滴たりとも、こぼすことは許さん。
5 しつかりと、受け止めるよ……！！【射精】」
6

7 SE:射精へピストン終了

8 SE:結合を解く

9 SE:二人がベッドの上で動く際の衣擦れ

10

11 白嶺【満足げなため息】 ああ……やはり、

12 お前とのまぐわいはよい。

13 痛いところはないか？ うん、ゆっくりと息をしなさい

14 吸って…吐いて…いい子だ。

15 落ち着いてきたな。」

16

17 白嶺「ああ、素晴らしい夜だった。

18 このまま終わらせるには、惜しいくらいに。

19 いっそ、このままお前をとぐろに閉じ込めて、

20 連れ帰ってしまおうか…。

21 お前が望むなら、私はいつでもお前を私の領域に隠してやるぞ。

22 お前のために、美しい着物も、壮麗な屋敷も、

23 美酒も美食も用意してやる。

24 いつでも呼ぶといい、待っている」

25

26 SE:鈴ちゃん

27

28 【白嶺がその場から消失】

29

30 SE:鈴虫の音が帰ってくる

1 トラック⑥ 邪神

2 怯えた様子の後輩が家に突撃してくる。
3 白嶺信仰の広まり始めは良かったが、私欲に塗れた願いが無尽蔵に白嶺に流れ込んだ結
4 果、神から怪異奇りの存在になる白嶺
5

6 SE:玄関のピンポン連打

7 SE:応答(ブーン)

8
9 【1 インターフォンから慌てた声】

10 後輩「あああ！ やっと出てくれた！

11 っつか、ドア開けて！

12 ヤバイんですってマジで！

13 アイツが追い付いてくる！」

14
15 【ヒロイン「落ち着いて」】

16
17 後輩「落ち着けるわけじゃないですか！

18 ねえ先輩、シロミネサマって、本当はなんなんですか？

19 僕はちょっと宝くじとか当たれば十分だったのに、

20 白嶺様に祈れば嫌いな奴を殺せるとか、

21 みんなどんどんおかしくなって……！

22 【震えて、背後を伺いつつ】音が聞こえるんです。

23 ずるずる、ずるずるって、

24 大きな何かがい回る音が、ずっと、今も！

25 僕を食おうと近づいてきてる！」

26
27 後輩「ねえ、助けてくださいよ……！」

28 お払いに行っても追り返されたんです。

29 もうどうしようもないって。

30 汚い祈りで神を汚した罰だって」

31
32 後輩「先輩、知ってたんじゃないですか？

33 あいつに祈ったらこうなるって。

34 知ってて、僕に教えたんだ！

35 僕を生贄にするために！」



1
2 【1】
3 後輩「だからあんたは無事なんだ！
4 あんたが一番最初に始めたくせに！」
5

6 後輩【啜り泣き】…なんで僕がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ……
7 なんてなんで！
8 お前が責任取れよ！ お前が殺されろ！
9 お前がああ訳のわからない蛇に食われて、
10 地獄に行けばいいんだ！
11 それでこの呪いを終わらせてくれよ！」
12

13 SE:扉ドンドン

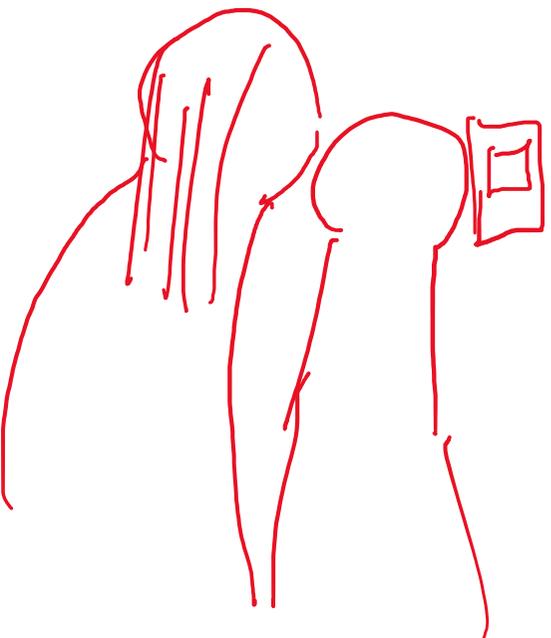
14
15 後輩「ああ、もうダメだ……！」
16 音が、音がもう、すぐそこに……！
17 なあ、開けてくれよ！
18 開けろってば！
19 開けろってこのクソアマ——あ【呆然】
20

21 SE:人間が圧殺される音

22
23 【3 耳もとから】
24 白嶺「迎えに来たぞ」
25

26 SE:鈴の音ンヤン

27



トラック⑦ 御迎

完全に邪神と化した白嶺が、ヒロインを神隠しするために現れる

【ヒロイン、突然耳元で声がして、驚いて振り向く】

SE:振り向く衣擦れ

【1】

白嶺「おそろしかっただろう。」

待たせてすまなかったな」

【白嶺、ヒロインを抱きしめる】

SE:抱きしめる衣擦れ

【3】

白嶺「本当はもっと厳（おごそ）かに

お前を迎えにくるつもりだったのだが……

薄汚いネズミのせいで少々段取りが狂った」

【白嶺、少し体を離してヒロインを見る】

【1】

白嶺「まあいい、形ばかりにこだわっていても仕方がない。

さあ、目をつむって。

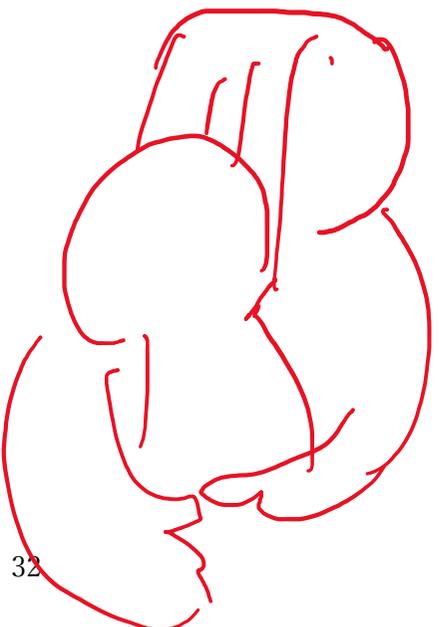
ようやっとうちが用意できたんだ、案内しよう」

【ヒロイン「うち？」】

白嶺「シー、説明は向こうでしてやる。ほら……」

【訳もわからず従うヒロイン】

SE:鈴ンヤン



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

【白嶺のねぐら（洞窟）に転移】

SE:驚いて身じろぎするヒロインの足音

【洞窟ですが、反響なしで大丈夫です】

【1】

白嶺「ごらん。これが私の新しいねぐらだ。

はは、そう驚くな。ここも異界の一角だ。

もとは簡素な洞窟だったが、人の子であるお前が過ごしやすいよう、少しばかり手を入れた。

今はまだ無骨だが、じきに壮麗な神殿になるだろう」

【ヒロイン「後輩はどうなったの？」】

白嶺「……なんだ？

あの浅ましい欲ばかりを押し付けてきた、

矮小なネズミの生死が気になるか？

ふむ……さすが、お前がいちばんに私の存在をばらした相手だ。

一つ、教えてほしいのだが」

【7 耳元で】

白嶺「あのネズミは、お前にとってそれほど重要な存在だったか？」

【ヒロイン、否定する】

【1】

白嶺「【上機嫌に】違うならばいい。

なに、貧相な供え物で、

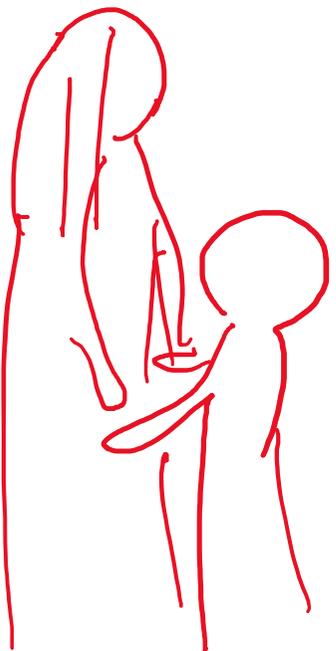
分不相応な望みを抱いた罰をあたえてやったのさ。

あまり楽しいものではないが、

こうして分を超えた人の子にきちんと神罰を与えていると、

人間たちはより一層私への信仰を強めていく。

ふふふ、恐れれば恐れるほど、私は強大になっていくのに、なあ？」



1 【ヒロイン「殺したの？」】

2
3 【1】
4 白嶺「ため息」人の子一匹の生死がなんだ。

5 ここで消えゆくばかりだった私にさえも、
6 あたたかな情を移したお前らしいことだが……。
7 忘れなさい。

8 現世に生きる者の生も死も、もはやお前には関係ない」

9
10 【7 耳元にグツと近づいて】

11 白嶺「なぜか分かるか？」

12
13 【7 ちょっと離れて】

14 白嶺「ははは、分からないか、それとも分からぬふりか？」

15 まあどちらでもいい、お前がそうして誤魔化すというのなら――

16 【耳元で】私が、手ずから、じつくりと、教えてやろう」

17
18 【7 耳もと】

19 白嶺「服を脱ぎなさい、全てだ。

20 私とお前を隔てるものなど、必要ないだろう？」

21
22 SE:シヤン

23 SE:脱衣衣擦れ

24
25 【1】

26 白嶺「いい子だ。

27 一度の命令で、自分で脱げるようになったな。

28 相変わらずお前の皮膚は薄くて柔らかくて……

29 思わず、噛み破りたくなる。

30 あの口、ひと舐めたお前の血の味……

31 思い出すだけで腹が減る。

32 だが、食べばお前は消えてしまう。

33 舐めて味わうだけならば、永遠に永遠にたのしめるといふものだ」

34
35
36

1 【1】

2 白嶺「だからほら、首筋を見せておくれ、そう……【ひと舐め】。

3 ああ、美味しい、美味しいな。極上の美酒のようだ。

4 ……どうして声を抑える。

5 私の前では、何も隠さなくていい」

6

7 白嶺「どうせ取り繕ったところで、匂いで丸わかりだ。

8 発情した雌の匂いが、嗅がずとも漂ってくるぞ。

9 そうかそうか、お前も私が恋しかったのか。

10 それではお前の望み通り、存分に可愛がってやろうな」

11

12 白嶺「ああ、しかし……ここでは岩肌がお前を傷つけてしまうな。

13 お前のために柔らかな寝床を用意してやりたかったが……。

14 ふむ、そうだな。少し目を瞑っていなさい」

15

16 【白嶺が半人半蛇の姿に変身し、上からヒロインを見下ろす】

17

18 SE:重たくてズルズルした音、もしくはメキメキした音

19 (架空の音で申し訳ないです、実際に効果音つける際はイメージサンプルお出しします)

20

21

22 【音響監督相談…白嶺が変身した結果、ヒロインの顔と距離ができていたので、9で椅子

23 に乗ってもらった方が距離感が出てよいかと思います、収録の感じで相談させていただきます

24 っ】

25

26 【6 上から】

27 白嶺「もう目を開けていいぞ」

28

29 【ヒロイン、白嶺の人外姿にビビる】

30

31 白嶺「ははは！ 驚いたか？

32 私が蛇の化身なのは知っていただろう？

33 死にゆくばかりだった小さな蛇を、

34 人の子が祭って神へと変えたのが私の始まりだ。

35 今はほら、お前の集めた信者のおかげで、

36 これほど大きく、強くなった」



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

【白嶺、とぐろをまくように動きながらヒロインに近づく】

【9から1へ、左回りにぐるっと回りながら話してください】

白嶺「さあおいで、私の上に乗るといい。

気をつけなさい。鱗の上は滑りやすい

ここから落ちたら、弱いお前は骨が砕けて痛い思いをする。

ほら、私の手を取って。

そう、しっかりと掴むんだ。

この体は、少々取り回しが悪い」

【1】

白嶺「どうした、そんなに青ざめて。

お前がこの顔を気に入ってるから、

上半身だけは人の形に残しておいたのに」

白嶺「がんばらないな。

ここまで不敬な態度で許されるのは、

お前くらいのものだぞ。

しかたない。恐れを忘られるよう、

牙を入れてやろう。首を出せ」

SE:鈴ちゃん

【3】

白嶺「ああ、この甘い香り……」

酔っ払いそうだ…【ヒロインの首筋を噛み、ひとなめして離れる】」

【3 耳元で】

白嶺「ほら、もう怖くない。

そのまま私に身を任せるんだ。

何も考えずに、ただ肌に触れるものだけを感じている。

どうだ、鱗も慣れると悪くないだろう。

でこぼこがお前の股をこすって…」



1 SE:蛇のみじろぎ

2
3 【1】
4 白嶺「はは、なんて声だ。

5 気に入ったようで、何よりだ。
6 遠慮しなくていいぞ、思い切り楽しむといい。
7 お前のために、わざわざこの姿を晒しているのだから。
8 ふふふ、随分とご満悦だな」
9

10 SE:水音(蛇素股)

11
12 白嶺「いいぞ、そのまま果でてみせろ。
13 そのほしたない汁を私に擦り付けて、
14 あさましい姿を私に晒して、私を喜ばせておくれ。
15 お前がこうして私に縋るのなら、私は100年でも200年でも、
16 飽きずに存在できる」
17

18 【ヒロイン「100年？」】

19
20 白嶺「しいー、余計なことを考えるな」
21

22 【ヒロイン、よくわからないが事態がまずい方向に行っていることを察し始める】

23 【3】
24 白嶺「こら、考えるなというに。」
25

26 【ここから耳なめしつつお願いします】
27 今更お前が何を思おうと、もうどうしようもないのだから。
28 お前はこうして、このまま私に愛され続けてればいい。
29 すぐに何も考える気にならないほど、ドロドロにしてやる。
30 だからこのまま、私に何もかも、明け渡してしまえ【耳舐めここまで】

31 SE:ヒロインの水音

32
33 【3 耳元】

34 白嶺「聞こえるか、お前のぬめりが私の上を滑って、
35 発情しきった音を立ててるのが。
36 よしよし、すっかりと出来上がってきたな……」

SE:水音 (指挿入)

白嶺「はは、すんなりと指を呑みこんだ。
そんなに欲しかったのか、うい奴よ
お前は、どこが気に入ってるのだったか」

SE:手マン水音 (遅)

白嶺「出し入れるたびに音を鳴らす、浅いところか？
それとも、奥にある…この、ざらついた部分？
ははは、両方か、いいとも。
存分に可愛がってやろう、力を抜いて、私に集中しなさい」

SE:手マン (速)

【1】
白嶺「ははは！ いい声だ。
いいぞ、もっと聞かせろ。
指だけでこのザマなら」

【3 耳元でねっとり】
白嶺「私自身を挿れた時には、
どれほど良い声で鳴くのだろうな？ 【手マン終了】」

【白嶺の陰茎 (一本め) をヒロインの隠部に擦り付ける】

SE:水音 (単発)

【ヒロイン、白嶺の陰茎が2本あるし両方外サイズなことにビビる】

【1】

白嶺「どうした、驚いた顔をして。
ああ、この状態で見るのは初めてだったか。
そうだ、蛇はな 【7 耳元で】二本持っているのだよ」

1 白嶺「少々人型より大きくなってしまったが、
2 なに、問題はあるまい。
3 お前も十分馴染んできた、痛みは感じないだろうよ。
4 脚を大きく開きなさい、いい子だ、腹に力を入れるなよ。
5 息を吐いて…【先端挿入】
6
7
8

SE:挿入

9 【7】
10 白嶺「ふ、う…流石にきつい、はは、
11 しっかりと濡れているな……
12 私が、中を擦るのを感じるか？
13 今は呼吸に集中しろ。
14 馴染むまでこうして……耳を食んで待ってやるから」
15
16

【7 耳舐め30秒程度】

17
18 白嶺「はあ……ようやく馴染んできたな。
19 奥まで入った。
20 ふふ、勝手に締めるな。
21 そう悪戯ばかりしていると、仕置きしてしまうよ？
22 なんだ、それが目当てか？」
23

SE:ピストン開始(低速)

24
25
26 【1 ピストンしつつ】
27 白嶺「少しくらいの悪さなら、許してやるとも。
28 お前が私の関心ほしさにするおいたなど、
29 可愛いものだ」
30
31

32 【1】
33 白嶺「苦しいか？
34 その割には、お前のほとんどは随分嬉しそうに私を飲み込んでいる。
35 お前の体液が溢れて、どんどんすべりが良くなっていく。
36 そろそろ、激しくしても、問題はなさそうだな」

SE:2 ストン加速

白嶺「つははは、いい具合だ。
すっかりと私の形に慣れて、あさましい程に私を求めて……
いかな、うっかりすると、壊してしまえそうだ」

【ヒロイン、もがいてなんとか脱出を図る】

白嶺「どうして逃げようとする？

お前がもがいたところで、私を振り払えるはずがないだろう

はは、愚かささえも愛らしい

狂うなら狂ってしまえ、私が許す。

うん、中が狭くなってきた。

そうかそうか、もういきそうか」

【3 耳元】

白嶺「なら、いくといい。

人とは比べ物にならない大きさのものを啜え込んで、

はしたなく鳴いて、今更なにをためらう？

【ここから耳舐めしつつお願いします】ほら、もう我慢も限界だ。

このまま、素直に、いってしまえ。

ほら、ほら、ほら——っ【射精】

【ヒロイン達すると同時に、白嶺も達する】

SE:射精&ピストン終了

【1】

白嶺【満足げなため息】——、ああ、随分と精をこぼしてしまったな。

こんなに中が狭くては、それも仕方がないか…」

【白嶺、こぼした精液をヒロインの尻穴に塗り込め始める】

SE:水音

1 【1】

2 白嶺「こら、暴れるなど言ったはずだ。

3 まさか、一回で終われると思ったのか？

4 今のは、慣らしだ

5 一気に両方を使われては、流石に壊れてしまうかも知れんからな」

6 白嶺「見なさい、私のもう一本は、まだお前を求めてみなぎっている

7 お前の仕事は、私を満足させることだ。

8 なに、簡単なことだとも」

9 白嶺「私の陰莖は二本あり、お前の穴はそこに二つ付いている。

10 であれば、両の穴を使って致せばより楽しめる

11 案ずるな、しっかりと慣らしやる」

12 SE:水音低速(ここから(尻を精液でほぐす)

13 白嶺「ふふ、やはりこちらも狭いか

14 私の指を食いちぎらんばかりに、締め付けてくる。

15 そんなに怯えずとも、もう取って食った後だというに」

16 白嶺「抵抗しても、長引くだけだぞ……私は楽しいが、お前は後で辛いだろう。

17 ふむ……しかし……慣れぬうちは仕方がないか……口を開けなさい

18 【ここからディープキスしながら】こっちに集中するんだ、

19 私の舌を追って……ああ、お前は、どこもかしこも、狭い……

20 ああ、いいぞ、やっと、ほぐれてきた」

21 SE:尻(ほぐし)終了

22 白嶺「さて、もう一度だ。

23 力を抜いて……今度は両方を入れるぞ【挿入】

24 SE:挿入(二本同時)

25 SE:ストーン低速

26 36

1 【1】
2 白嶺「恍惚として」はあ、たまらないな、少々心配だったが、
3 これなら十分、問題はなさそうだ。
4 両の穴いっぱい私を啜え込んで、
5 それでもまだそんな声が出せるなら、
6 はは、いいぞ、もっと聞かせておくれ」
7

8 SE：ピストン中速
9

10 【7 耳元】
11 白嶺「脳が焼き切れそうに気持ちがいいだろう？
12 存分に、その快楽を楽しむといい。
13 私の悦びは、お前の悦びだ。
14 私がお前と完全に交わられて、どれほど嬉しいかわかるだろう、うん？」
15

16 白嶺「思う存分鳴いて、私の無聊（ぶりよう）を慰めておくれ。
17 お前が私を、神の座に引き戻したのだ。
18 だからこれは、お前への報いでもある」
19

20 SE：ピストン高速
21

22 白嶺「私の人間、私のいけにえ、私の花嫁。
23 お前が私の名を呼ぶたび、祈るたび、畏れるたび、
24 私に力が満ちる。
25 だから私は、お前を永遠に、守ってやれる。
26 ずっと、ずっと——お前を、離しはしない…っ 【射精】」
27

28 SE：射精・ピストン終了
29

30 【7】
31 白嶺【吐息】…よしよし、よくがんばったね。
32 おや、気絶してしまったか」
33
34
35

36 【白嶺、自分のへビ部分にヒロインを横たえ、自分の上半身を沿わせる】

SE: 白嶺身しろぎ (ずるずる)

【白嶺、眠ったヒロインを起こすつもりはなく、独り言のように語りかける】

【1】

白嶺「……最初はお前が、ただ健やかであればよかった。

私に祈りを捧げた、最後の人として。

それで、十分だったはずなのに。

身の内側から、声がするんだ。

お前をさらえ、隠してしまえと。」

白嶺「……お前が私を、壊してしまった。

お前が広め、お前が穢(けが)した。

もう二度と、過去の清廉さを取り戻せはしないだろう」

【3 耳元 滲み出る邪悪な嬉しみ】

白嶺【ため息】「……それなのにどうして、私は今こうも嬉しいのだろうな。

ふ……ふふ。

ははは！ あははははは！」

SE:鈴シヤン

【終わり】

